上田郷友会と千曲寮

前千曲寮理事長　清　水　幾　男

先日、諏訪郷友会の役員の方とお会いして懇談する機会があった。諏訪郷友会には、上田郷友会と千曲寮という関係のように長善館という学生寮がある。これが設立されて丁度100年余になる。これは大変な節目であるから盛大な記念祭を予定しているとのことでした。

千曲寮は今年で創立79年ですから、長善館は遥に永い歴史をもっているわけです。これについて、郷友会の大先輩である金井章次氏が次のように語っています。

「千曲寮をつくろう」という機運は明治43年、私が帝大2年の末頃から始っている。直接の動機は、当時諏訪地方出身者を収容した長善館が本郷にあり、東都の学生間でも話題になっていて、長善館が信州の青年を代表するような気風さえ見えた。これに刺激され、上小地方の学生も打って一丸となろうと上中会の席上で話題となっていた。

この長善館に対抗する学生集団を持とうとする機運と、当時の下宿難に対する解決策として、この運動が早期に実を結ぶ結果となったわけである。

金井章次氏はこのように語っておられるが、この運動が具体的に動き始めたのは大正5年頃。当時の社会情勢について若干ふれて見ましょう。時まさに「大正デモクラシー」全盛の時代。これそのものは何も悪いわけではないのですが、これに付随して発生した軽兆浮簿の風潮が一世を風靡していたのです。

そこで郷党の大先輩、先覚者の皆さん、小河滋次郎、小松武平、正木直太郎、宮下釟太郎、勝俣英吉郎、小平三郎、山極勝三郎、五島慶太、金井章次、萩原丈夫、滝澤七郎氏ら（いずれも郷友会の有カメンバー）が相寄り協議して千曲寮創立へと動き出したわけです。

こうして大正6年9月に発表された千曲寮創立趣意書の冒頭で『学術文芸に国境なし、近時郷里を出で都門に入り、高等教育を受ける者すこぶる多数となれり』と説き起こしています。しかし、これらの学生を対象とする営利事業や誘惑が横行し『これ実に危険なる傾向にして、この風潮は郷里の父母に非常なる不安を感ぜしむるに至れり』と憂慮の念が表明されています。

このような風潮をみて、理想的な宿舎を設置しなければならないと、前記の郷友会の同志が協議していたところ、旧上田藩主松平子爵が、麹町の土地を提供してくれたので、郷党有志の寄付とあいまって、ここに悲願の第一次千曲寮が出来上がったのです。

これによって『郷里の父兄をして心を労せしむることなく、上京の学生をしてその道を誤らしめず……もって品性の修養、学術の研究、一日も怠ることなく國家の良材たるを期するは……』と寮創立の精神を格調高く説いているのは、今日まで通じている不変の大理想と言うべきでありましょう。

こうして出来た第一次千曲寮も、あの関東大震災によって焼失の憂き目をみたのです。そこで大正12年12月の寮再興趣意書は『たまたま9月1日の大震災により不幸灰烬に帰し、ために同郷の学生をして帰趨を失わしめ、すこぶる同情に堪えざるところになり』と強調、再度郷党の有志の援助を受けて完成したのが麹町三番町に誕生した新寮舎なのです。

筆者もこの麹町寮舎の出身です。こうして郷党有志の多年の苦心の結晶であり、麹町三番町にその偉容を誇っていた千曲寮も、昭和

20年5月25日の大空襲によって痛恨の極みながら焼失してしまったのです。

ここでも千曲寮の不滅の生命は、郷党有志の援助によって、不死鳥のように甦り、戦災にもめげず生き残りました。当時の専務理事勝俣稔氏、復興委員長滝澤七郎氏らの第三次復興趣意書によると『戦火による焼失で、折からの住宅払底甚だしく、よる処なき多数の地方出身学生は、非常の不便を蒙り、中途の退学の止むなきものを生ずるに至りました。一同この現状を見るに忍びず、再び決起し、寮の復興に邁進することとなり……』と述べ、郷里の学生を思う眞情に心うたれるものがあります。

このあと戦後幾多の苦難の道をたどりながらも、不屈の闘志をもって、新たなる発展のため昭和44年3月、三鷹市下連雀の現在地に移り、生成発展のための営みを力強く進めており、その姿はまさにフェニックスです。

また現在の千曲寮は、諸先輩の御尽力によって、育英貸費制度も完備し、優秀な前途有為の学生への支給も実施されています。

創立79年、この永い年月の間、幾多の先輩が営々と築きあげてこられた貴重な伝統に思いを致し、この文化的財産を更に守り抜き、発展させていかねばならないという重い責務をひしひしと感じています。

それからまた、千曲寮は、ただ割安な宿舎だけであってはならないと思っています。千曲寮における最大の使命は、ここが郷里の青年達の修業の場であり、人間形成の場であるという確信をもって、青年達の育成に従事しています。郷友会の皆様の絶大なるご支援をお願いいたします。